

# Deai students の その後

実在する日本の高校生 7人の人物像を写真とストーリー、ビデオで紹介した“Deai: The Lives of Seven Japanese High School Students” ([www.tjf.or.jp/deai](http://www.tjf.or.jp/deai)) が発行されてから10年近くたちました。今号では以下の3人を取りあげ、かれらが高校卒業後、何を考え、どういう経験をして、自分の生きる道を模索してきたか紹介します。

## 高校時代のかれら・・・

### 玉城俊一



沖縄県伊是名島で中学まで育つ。沖縄本島の高校で沖縄の芸能と歴史を勉強する。小学校から中学校にかけて不安定な時期もあったが、中学2年生のときに伊是名島の太鼓グループのメンバーになったことをきっかけに音楽にのめりこむ。路上で、自分で作詞作曲した曲を歌っていた。将来の夢は、シンガー・ソング・ライター。誰にでも愛される明るいキャラクターである半面、ちょっとしたことで深く悩む繊細な一面もあった。

### 柳有真



大阪で生まれ育つ。在日韓国人3世。小さいころから、家の中は「韓国」、外は「日本」という環境で育ったため、自分のなかに二つの異なる文化が自然に共存している。インターナショナルスクールが併設された自由な校風の中高校に通う。しつけに厳しい家庭と自主性が重んじられる学校とのギャップに悩み、半年間休学したこともあるが、復帰後は高校生活を楽しむ。スポーツが大好き。将来の夢はスポーツカウンセラー。好奇心がおうせいで、興味があることには睡眠を削っても取り組む。

### 山本隆幸



京都で生まれ育つ。生まれつき難聴という障害をもつ。小学校3年でアメフトを始めたことで、スポーツの才能が開花したり、チームメイトとのやりとりを通じてコミュニケーションの幅が広がるなど、人生が変わった。前向きで、好きになったら、とことんやり通す性格。難聴だからといって特別扱いはされたくない。自分は普通の人間。高校は、アメフトの強い大阪の高校に進学。社会人になってもずっとアメフトを続けたいと思っていた。

# 大切なのは自分の夢を強く思い描くこと

玉城俊一

シンガー・ソング・ライター  
沖縄

玉城さんの高校時代のストーリー  
玉城さんの公式ウェブサイト



Photo: Nakajima Yuko

## 大学で琉球古典音楽を専攻

ぼくは、中学のころからシンガー・ソング・ライターになりたいと思っていたので、高校卒業後は、音楽の幅を広げるために沖縄県立芸術大学に進みました。大学では、高校時代と同じく琉球古典音楽(\*1 以下、古典音楽)の歌と三線(\*2)を専攻しました。

大学で古典音楽の理論や技術を学んで、三線の使い方の幅を広げることができたことが、今のぼくの音楽のベースになっていると思います。古典音楽の詞は、聞く人それぞれが情景を思い浮かべ、想像をふくらませることができるので好きです。詞を通じて沖縄の昔の人たちの考えかたを知ることができます。ぼくがすごく好きなのは、「花は、寒い冬を越してからじゃないと、そのきれいな花を咲かすことはできない」という詞です。ちょうど挫折を感じていたときに、この詞に触れてはげまされました。人間って、時代が変わっても、考えることや大切に思うものは変わらないんだなって実感したんです。

大学時代は、大学の勉強と、大学での古典音楽の公演のための稽古、そして一般のイベントでの古典音楽や沖縄民謡の演奏活動にほとんどの時間を使っていました。このころは、自分の曲づくりやライブは、ときどきしかやっていませんでした。



Photo: Nakajima Yuko

ライブ前のリハーサル。

\*1 琉球王朝時代（1429～1879年）に宮廷音楽として演奏されていた音楽。  
\*2 「三線」と書いて「さんしん」と読む。沖縄・奄美諸島方面で使われる撥弦楽器。15世紀から16世紀前半に中国から伝わったとされる。沖縄の古典音楽や民謡の伴奏楽器として広く愛好されている。

## シンガー・ソング・ライターの道を突き進もう！

実は、大学卒業後何をするか、4年生の9月になって、同級生の就職が決まり始めるまで考えていませんでした。それまでの3年半は、大学の勉強と演奏活動に没頭していたし、音楽の道に進むという気持ちはどこかにあったのかもしれませんが。

沖縄県庁や伊是名の役場で働いたらと勧めってくれる人もいて、ちょっと考えてはみたのですが、結局、音楽以外の世界にいる自分の姿は想像できませんでした。

ぼくは、大学在学中に琉球古典音楽安富祖（あふそ）流コンクールの歌・三線部門で最高賞を取り、さらに、歌・三線を教えるための教師免許も取得していました。だから、同じ音楽の世界でも、古典音楽の道に進む選択肢もあったかもしれません。古典音楽は、長い年月をかけて、まず先生から教えられる通り正確に演奏できるようになり、そのうえで細かい部分を自分なりの方法で表現していく世界です。それも好きなんですけど、ぼくは、やっぱり自分で自由に考えて表現することに強い喜びを感じます。自分でつくった曲を自分で歌って、みんなに聞いてもらうのが、自分がいちばん情熱を傾けられることだと思いました。

進路について考え始めるのはすごく遅かったけれど、結論はすぐに出ました。大学を卒業したらすぐにシンガー・ソング・ライターへの道を突き進もうと決心しました。何の迷いもありませんでした。



Photo: Tamaki Shun'ichi

自宅で弟とゲームをしながらくつろぐ。



## 歌えない・・・

その後、音楽事務所に所属して、バイトもやめ、音楽活動に専念できるようになりました。ミニアルバムをリリースしたり、沖縄の放送局のTVドラマに出演したりして、プロとしての道を順調に歩んでいきました。

ところが、プロになって1年が過ぎた2008年の12月、大きな試練がぼくの前にたちだかります。当時、ぼくは、大きな会場でも迫力のあるパフォーマンスができるように、歌う声をもっと大きく太くしようとしていました。いろいろな人に話を聞いたり、本を読んだりして、さまざまな方法を自己流で試していました。すると、ある時、声がかすれて出なくなってしまったのです。無理に今までと違う声の出しかたをしようとしたせいで、のどに血マメができていました。

何とかして声を取り戻そうとあせりました。でも、もがけばもがくほど症状は悪くなり、しまいには音階すらコントロールできなくなってしまいました。「ステージに立ちたくない」と思っても、ライブの予定はずっと先まで決まっていた、休むこともできません。何千人というお客さんの前でライブをしている最中に、思うように歌えなくて泣きそうになることもしょっちゅうでした。声が出なくなるまでは、何をやっても楽しかったのですが、このときはプロの厳しさというものを痛感しました。「ああ、何をやってもだめだ・・・もう歌をやめないといけなのかな」と思いつめたりもしました。それでも歌うことをやめなかったのは、結局、シンガー・ソング・ライター以外の自分の姿を想像できなかったからです。



伊是名島でプロモーションビデオを撮影。

Photo: Otsuki Kazuhiro

## 夢がひとつになった！

大学卒業後は、薬局のアルバイトと古典音楽や沖縄民謡の演奏でお金をかせぎながら、曲作りをしたり、ライブをしたりしていました。まず自分のCDを出すことが目標だったので、曲をつくっては、沖縄在住の音楽プロデューサーのところに通っていました。プロデューサーの仕事が終わるまで、隅のほうでそっと待っていて、すきを見て、「この曲聞いてもらえますか」とお願いするのですが、「新しい曲ができたなら、また持ってきなよ〜」と、軽くあしらわれてばかりでした。でも、あきらめずに、何度も曲を練りなおして、プロデューサーのところにもっていきました。そうやって2年くらいねばり強くがんばって、「夏鮮想歌(かっせん

そうか)」という曲が生まれました。「夏鮮想歌」はぼくがつくったことばで、「あざやかな夏の思い出」という意味です。「島の夏祭りで出会った女の子に恋をして、うまくいかずに終わってしまったけど、とてもいい思い出。今ごろ、その子はどこかでがんばっているんだろうなあ。そう思うと自分も幸せな気持ちになる」という想いを曲にしました。この曲をプロデューサーがとても気に入ってくれて、CD化が決まったのです。自分の夢がひとつになったこのときのうれしさは、今でも忘れることができません。



ライブでは三線もよく使う。

Photo: TUF

## 自分の夢を強く思うことの大切さ

そんな状態のなかで読んだ本に、「夢を実現するには、自分の夢をはっきりと意識して、その夢が実現できると強く思い続けることが大切」と書いてありました。声が出ないという追いつめられた状況のなかで、ぼくが心から願ったのは、「最高の三線の演奏をして、最高にいい状態で自分の声を響かせて、いろいろな人に感動を与える」ことでした。その日から、そういう「最高の」自分をいつもイメージして、ライブのときは、「自分が伝えたいことをきちんと表現して、みんなが感動するようなステージにする」という気持ちを強くもつようにしました。しばらく続けて、それが普通にできるようになると、心に余裕が出てきました。明るい気持ちももどってきました。そうしたら、「マイナスのことばかり悩み続けても何にもならないなあ」と、ストンと思えたんです。それまでとは逆に、すごくポジティブになって、病院に通ってのどの治療をしながら、「絶対負けなぞ」という気持ちでライブを続けていきました。少しずつのどもよくなり、1年たつころには、もどおり声が出るようになりました。

今思い出しても、とても辛い1年でした。でも、葛藤のなかで、自分が本当にやりたいことは何か意識して、それをやりたいと強く思い続けることの大切さを学びました。精神的にも強くなったし、いろんな角度から物ご



伊是名島でのチャリティーライブが終わって。島でのライブはとくに緊張しますが、みんなあたたかく受けとめてくれます。

Photo: TUF

とを見られるようになりました。この試練がなかったら、自分の夢やプロとしての意識をこんなに高めることはできなかつたし、その後の忙しい日々にもたえられなかつたと思います。今では、この苦しかった日々から感謝しています。

## シンガー・ソング・ライターという仕事

自分で曲をつかって、ライブをして、レコーディングをします。その合間に、テレビやラジオに出演するなどプロモーション活動もします。あとは、「みんなに幸せを与えること」かな(笑)。今年は、大手のレコード会社からメジャーデビューすることができました。今は忙しくて、休みはほとんどありません。休めるのは夜だけ(笑)。

曲をつくるときは、ふっと浮かんできた音をもとにまずメロディをつくります。それから、何気なくわいてきたことばをふくらませて歌詞をつくりあげていきます。以前は、5か月かけて、100回以上もつくりなおしをして、自分がとことん納得のいく曲をつくりあげたこともあります。いつもそのくらいの時間とエネルギーをかけられたらいいのですが、今は忙しいので、なるべく短い時間ですごくいい曲をつくるにはどうしたらいいか、自分なりに方法を考えながら曲づくりをしています。ものすごく気合いを入れて曲づくりにのぞむと、なかなか最初の一步を踏みだせなかつたりします。でも、短い時間でつくりたいと考えると、「とりあえずつくってみよう」という気持ちになります。「たいしたことないな」と思うメロディでもとりあえずつくってみて、そのあと手を加えていくと、自分でも驚くようないい曲がうまれることもあります。

シンガー・ソング・ライターとしていちばん幸せを感じるのは、声がよくのびていい感じで歌えたとき。そして、ライブにきてくれた人たちに何か伝わっているという手ごたえを感じるときです。もしかしたら、「みんなに伝わっている」と思うのは自分だけかもしれません。でも、自分がいい感情でゆったりと歌えたときは、ああ今日のライブはよかったんじゃないかなと思います。

逆にしんどいのは、締め切りが迫っているのに曲ができていないとか、レコーディングで何十回歌ってもOKが出ないとか、せっぱつまった状況のときですね。あとは、やっぱり睡眠時間が少ないときかな。しんどいときは、気持ちを切り替えるために、「いや、ぜんぶがうまいっっている!」、「今は、最高の自分になるための階段を一步一步登ってるところなんだ!」と真剣に思うようにしています(笑)。



Photo: TJF

ライブでは三線もよく使う。

## 自分の音楽について

ぼくにとっていいメロディとは、自分の心に響くメロディです。自分が感動できないと人に感動を与えることはできません。ぼく

が好きなのは、風のようにゆるやかで自然な感じか、逆にすぐはじけた感じのメロディ。歌詞は、さりげなくてわかりやすいけれど、実はちゃんと意味があって、心にぐっと迫ってくるものが好きです。今はやりの、ことばをいっぱい並べた歌詞はあまり好きじゃありません。

以前は恋愛の曲が多かったんですけど、今は、もっと大きなテーマで、人の心の奥底に触れるような歌詞をつくりたいと思っています。たとえば、具体的な恋愛の話じゃなくて、「愛とは何だろう」とか(笑)。まだCDデビューをしていなくて、ライブ用に曲をたくさんつくっていた頃、「普通の恋の歌をオレが歌う意味があるのかな」と考えました。いろんなライブをみて、ぼくがいちばんぐっときたのは、自分をかくさず素直な表現をしている人たちのライブ。大阪のバンドが大阪のことばで自然体で歌っているのを見たときは、「あー、これだよ」と思いました。大阪の人にはふだん使っている大阪のことばがある。ぼくには、生まれ育った伊是名島があり、沖縄のことばがあり、三線がある。そういう自分のルーツを自然に出せたら、歌がうまいとか下手とか、曲がいいとかなんとか関係なく、聴く人は感動するんだと思いました。

今では、沖縄の伊是名島出身ということがぼくのシンガー・ソング・ライターとしての個性になっている面もあります。でも、ぼくは伊是名島そのもののことを曲にして歌っているという意識はないんです。自分が伊是名島で生まれたってことは変えられない事実で、伊是名で太鼓に出合わなかつたら音楽をやっている今の自分はなかつた。伊是名島で生まれ育ったということは、自分の原点であり核になっています。結局、ぼくは自分のなかにあるものをせいっぱい表現しようとしている。音楽をとおして、自分自身を最大限に表現したいんだと思います。逆に言うと、自分のなかにあるものしか曲にしたいくない。なんだか歌詞がしっくりこない、この曲は歌いたくないと感じるときは、自分自身が経験したことではなかつたり、自分のことばではなかつたり、自分のなかにはないものだったりするときなんです。

ぼくは、「こんなことも、あんなことも、いろいろなことがあるけど、自分はせいっぱい生きてる」ということを曲にして、それを人に聞いてもらうことに幸せを感じます。だから、みんなにも、「オレはこうやってがんばってるよ。いっしょにがんばろうよ、幸せになろうよ」というメッセージを伝えたいと思っています。



Photo: TJF  
伊是名島でのライブ。



## これから

まず、日本で独特の存在感があるアーティストになりたいです。なんか、なれそうな気がするんですよね。アーティストとして成功して、いろんなところに家があって、車もフェラーリに乗ってる。でも、ピュアな心を持ち続けていて、たくさんの人に愛されている(笑)。人を幸せな気持ちにする大きな包容力があって、かつ強いオーラを放っているようなアーティスト。日本だけでなく世界中をツアーして、自分の歌をたくさんの人たちに聞いてほしいです。ぼくの曲が日本や世界の国の教科書に載ったりして、三線が世界の楽器になっているといいなあ(笑)。多くの人に求められて、アーティストとしての自分の存在意義を感じられるということが、ぼくの生きがいになっていくと思います。

それから、伊是名島のためにできることには、なるべく協力していきたいと思っています。今までも何回か島でチャリティーライブをやって、その収益を中学校に寄付したりしてきました。これ

からも、島の活性化につながるようなイベントに参加したいですね。あとは、伊是名に住んで税金を島に納めるとか・・・・・・・・。でも、そのためには、まず売れない!!(笑)



伊是名の中学校でスピーチ。  
島の中学生に、「みんなも夢をかなえることができる」というメッセージを伝えました。

Photo: TJF

## 高校時代をふりかえって

高校時代は、明るいキャラクターである半面、ちょっとしたことで「なぜ、なぜ、こうなったんだろう」ってぐるぐる悩んだりしていました。人に何か言われて悩むのは、自分に自信がないときなんですよ。考えてみれば、ぼくは、子どものころからずっと、どこか自分に自信がなくて、人に嫌われることをこわがる気持ちがあったと思います。学校という大きな集団のなかで、みんなから取り残されているような気がしたり、何か悪口を言われているような気がしたりして疎外感を感じていました。

今のぼくは、ただ悩むんじゃなくて、何をしたらいいか考えます。そういうことができるようになったのは、やっぱり声が出なくなったときの経験のおかげだと思います。「なんで声が出ないんだろう。オレ、このまま歌えなくなるのか」と、さんざん悩んで思いつめて、だんだん暗い男になっていって・・・・・・・・。でも、その葛藤のなかで、ただただ悩み続けても意味がないって心の底から納得したんですよ。

人にいやなことを言われて、感情的に反応することもなくなりました。「この人も、いっぱいいっぱいなんだな」と思えるようになりました。ムカッとしても、そういうときに限ってあとからいろいろ考えてみると、大したことじゃないんですよ。それなのに、この人はなんでこんなこと言ったのかなって気にし続けても答えは出ないし、そんなことにエネルギーを使うのはもったいないと思います。今は、何でこうなったのかと冷静に考えてみて、自分が悪いと思ったら、同じことを繰り返さないようにします。「どう考えても相手が悪い」、「これは理不尽だ」と思ったら、自分が気にすることは無い。そういうふうに分かると自分で答えを出すことで、必要以上によく悩むこともなく、自分にとって本当に大切なことに集中できるようになると思います。

高校時代の自分に声をかけるとしたら、「これから先も、まだまだつらいことや困難なことがあるかもしれないけど、それを一つひとつ乗り越えていくことで大きくなっていけるよ。苦しいことがあっても、それは、大きな夢に向かっていくためのステップなんだよ。乗り越えられない壁は絶対ないし、その壁の向こうに自分が求める世界がきっと広

がっているよ」と伝えたいです。同じことを、今の中高校生のみなさんにも伝えたいですね。ぼくが自分について語ることが、自分の夢に向かって進んでいくみなさんに少しでも勇気を与えることができたら本当にうれしいです。



「であい:7人の高校生の素顔」より

Photo: TJF

## しゅんいちさんのメッセージ

自分の夢のためにがんばっているとき、

かべにぶつかることがあります。

それは、あなたが成長するチャンスです。

だから、あきらめないうで、がんばってください。

かべをこえたら、あなたの夢に近づくことができます。

ぼくも、自分の夢のために、がんばっています。

これからも、いつしよに、がんばりましょう!



Photo: Otsuki Kazuhiro

# 自分なりに社会との 関わり方を学んだ!と

ユウ・ユウジン (柳有真)

保険会社社員  
大阪

ユウさんの高校時代のストーリー



Photo: Murashima Midori

## 希望と違う大学へ

高校を卒業するときには、尊敬する先生がカウンセラーだったのと、自分がいちばん好きなことがスポーツだったので、その二つをあわせてスポーツカウンセラーになりたいと思っていました。そこで、心理学が勉強できる大学を2年にわたって受験したのですが、自分が行きたいところに合格できず、家の近所の大学の経済学部国際経済学科に進学することになりました。偶然にも、タカ (山本隆幸) と同じ大学の同じ学部でした。



Photo: Murashima Midori

大阪城の前で

## チア・リーディングで社会との 折り合いのつけかたを学ぶ

わたしの大学生活の中心は、応援部のチア・リーディング (以下、チア) の活動でした。タカがいるアメフト部と野球部を中心に、ほぼ毎週末何かの試合の応援をしていました。それ以外にも、チアの大会や学園祭の舞台の練習などがあり、月曜以外は毎日部活をしていました。

チアは、華やかで楽しそうに見えるかもしれませんが、実はかなり高度な技が要求されるスポーツで、ハードな練習が必要です。わたしは試合を応援することより、一つひとつの技の完成度を高めることにおもしろさを感じていて、チームの演技構成も担当しました。

チアをやってよかったと思うのは、日本の社会に出る準備ができたことです。わたしの通った中高校は、インターナショナルスクールが併設されていて、いろんな国籍の生徒がいる、とても自由な校風の学校でした。ところが、大学の応援部はまった

く逆で、上下関係が極端に厳しい古い体質でした。たとえば、部活以外でも、先輩に会ったら、直立不動であいさつをして、先輩が通り過ぎるまでそのまま動いちやいけないんです。なんで普通に「こんにちは」と言って通り過ぎたらいけないのかまったく理解できず、いやでたまりませんでした。だから、最初のころは、先輩を見つけたらダッシュ

で逃げていました。でも、チアは大好きで続けたかったし、そのうち逃げるのも面倒くさくなって「やればすむのならやろう」という気持ちになり、4年たつころには何も考えなくても体が動くようになりました。

今ふりかえると、自由でフランクな人間関係が当たり前の世界から、そのまま日本社会にデビューしていたら、とてもきつかったと思います。大学時代は、自分の大切なものを大事にしながら現実の社会と折り合いをつける方法を自分なりに学ぶことができた時間でした。

## とことん勉強してみよう

4年生になって就職のことを考え始めたとき、大学でチアは一生懸命やっただけで、勉強は単位をとるためだけにしていたことに気づきました。

中高・大学でやっていたスポーツや競技チアは、賞をもらったりして、「わたしはこれがすごいんですよ!」と胸をはれるものでした。でも、社会に出たら、それだけでは通用しない。「自分はここで一度とことん勉強してみないといけない。経済の仕組みでもなんでも何か一つしっかりと知識を身につけたい」と考えました。そこで、大学院に進んで経済を勉強することにしました。11月に部活を引退後、必死に大学院受験の勉強をして、兵庫



休みの日は、ときどき、なんばに出かける

Photo: Murashima Midori



県にある大学院の経済学研究科前期課程に合格しました。

経済は、いろんなことがつながり、関係しあっているところがおもしろいと感じます。たとえば、どこか小さな国でおこったことが地球の反対側にある国に影響を与えたり、日本の資本が中国の沿海部に入ることが中国の沿海部と内陸部の格差をうむことにつながったりします。大学院では、外資とアジア市場と労働市場を組み合わせた研究をすることにしました。父の会社が韓国や中国にある工場で商品をつくっているのを間近で見たり、親戚のいる韓国に遊びに行き日本と物価が違うのを肌で感じたりしたことが、アジア市場や外資に興味をもつきっかけになったと思います。労働市場に興味をもったのは、経済の基礎は「人」にあると思ったからです。最終的に、「海外直接投資 (FDI) を受け入れた事による中国への影響」というテーマで修士論文を書きました。



Photo: Murashima Midori

なんばのアメリカ村でたこ焼きを食べる

## 保険会社に就職

そのまま博士課程に進むつもりでいたのですが、修士課程の修了直前になって、このまま社会に出ずに博士課程に進んだら、頭でっかちのダメな自分になるかもしれないと考え始めました。年を重ねるほど、いろんな環境に対する柔軟性や順応性、適応能力は低くなるでしょう。将来、博士課程に進むにしても、若いうちに一度就職して社会の荒波にもまれてみようと思いました。大学・大学院卒の求人時期はとっくに終わっていたこともあり、希望していたシンクタンクに就職先を見つけるのはかなり厳しい状況でした。結局、2月末にぎりぎり受けた大手生命保険会社に採用が決まり、4月に入社することになりました。

今の会社で働き始めて3年がたちました。最初の2年間は営業で、自分が担当する会社に出かけて行って、保険の勧誘や販売をしました。顧客の信用を得るために、アフィリエイト・ファイナンシャル・プランナー (AFP) 2級の資格も取りました。営業時代は、お客さんに信頼されていると感じるときがいちばんうれしかったです。今年から、自社の企業営業担当の人たちを教育する仕事をしています。岡山や高知を担当しているので、出張も月に2回くらいあります。まだ始まったばかりですけど、わたしが研修を担当した人が教えたことを実行してくれて、それで成果が出たら、きっと喜びを感じると思います。

大学で厳しい上下関係を経験したことは、今の会社ですごく

役に立っています。たとえば、目上の人にきちんとあいさつをすることが体にしみ込んでいるので、上司が近づいてきたら反射的に立ちあがってあいさつをします。それが、わたしの会社では、「あなたは礼儀がきちんとわかっている」と評価されたりします。仕事をしていくうえで少しでもプラスになるのならそれでいいと考えています。

そうやって社内での人間関係は大切にしながらも、何ごと自分の頭でちゃんと考えて、必要なら意見を言ったり、提案をしたりします。中高校時代は、いいことも悪いことも伝えあうのが普通でしたが、会社では物事をまるくおさめようとしてあまり意見を言わない人が多いように感じます。わたしは、同期の子や後輩にも、気づいたことは言うようにしています。たとえば、「ここはなおしておかないと、社外で仕事したときにこの子が恥をかく」と思ったら、言わないとかわいそうです。わたしは基本的に誰に対しても同じ言い方をしますが、それを受け入れる子もいるし拒否する子もいます。そのときは反感をもっても、後で振り返ったときに、「あの人の言ったことは正しかったな」と思ってもらえたらいいなと思っています。

仕事でしんどいこともありますけど、週一回キックボクシングで発散したりしてバランスをとっています。

## これから

これまで、大学進学も就職も、必ずしも希望通りにはいかなかったけれど、それぞれの場で自分なりのおもしろさや楽しみを見出してきたし、新しい自分を発見してきました。すべて理想通りに進んでいたら、自分の考えにとられすぎて、世間が狭いままだったかもしれません。だから、これからもあまり決めつけずに、予測できないことを楽しみながら、臨機応変に対応できる自分でいたいと思います。



通勤中

Photo: Murashima Midori



休みの日はお母さんの韓国料理のお店を手伝う

Photo: Murashima Midori

## 高校時代をふりかえって

高校時代は、同級生がいろんな国籍の人たちで、自己主張の激しい人たちも多く、わたしも埋もれないように自分をしっかりもたないといけないと思っていました。学校の文化と家庭の文化のギャップに悩んだり、休学したりしたこともあったけれど、すべて自分にとってマイナスの経験ではなかったと思います。

高校の頃は国籍というものに疑問を感じていて、人を国籍ではなく、「～文化のなかで育った人」と見るべきだと考えていました。今は、周りが日本人ばかりなので、そんなに国籍を意識することもなくなりました。ただ、在日韓国人3世の人たちは、国籍は韓国だけど、日本で生まれ育って日本語しか話せない人もたくさんいます。日本に税金も払っているのに、選挙権がなかったりするのはやっぱりおかしいと思います。

わたしは、なぜかわからないんですけど、今でも、在日韓国人3世でよかったなと思います。そうでなかったら、名字の「柳」も日本の漢字の読み方で「やなぎ」と名乗っていたと思うんですけど、中学のときから韓国語の読み方で「ユウ」と言っているし、誰かに「やなぎさん」って呼ばれたら「あ、ユウなんです」と訂正します。在日韓国人3世の子のなかには、韓国に行ったことがなくて、韓国語を話せない人たちも多いのですが、わたしは韓国に親戚がいるので韓国に行く機会も多いし、韓国語も話せるので、よかったと思っています。韓国ドラマも日本語吹き替えじゃなくて、韓国語の副音声で見ているのは自慢ですね（笑）。



「であい:7人の高校生の素顔」より

Photo: TjF



# 石の上にも10年!

## 山本隆幸

大学職員  
大阪

山本さんの高校時代のストーリー



Photo: Murashima Midori

### 小さいときからの努力が報われた!

高校卒業後、アメフトの推薦で大学に入りました。当時、アメフトの関西の大学リーグでは、関西学院大学・立命館大学・京都大学がずば抜けて強かったのですが、ぼくはその3強を倒したいという野望をもって、この3大学の次に強い大学を選びました。

大学生活はアメフト中心で、1週間のうち6日は練習をしていました。ポジションは高校と同じディフェンスバックで、2年生からレギュラーになりました。アメフト選手としての転機になったのは、大学2年のときに、関西学院大学と京都大学を撃破した試合です。どちらも、ぼくがインターセプト(\*)したことが勝利につながり、それをきっかけにアメフト関係者に注目されるようになったのです。小学校3年生でアメフトを始めてからずっと努力してきたことがやっと報われたと実感できた瞬間でした。ぼくのことを「天才」と言う人もいましたが、天才は「99%の努力と1%の才能」でつくられるもの。自分を信じてひたすら努力した結果が認められたんだと思います。ぼくは生まれつき難聴なのですが、障害をもつ人でもやればできるということを証明できたという達成感もありました。

(\*) 敵のパスを奪うこと。



Photo: Yamamoto Takayuki

大学のアメフトの試合

### 母校の職員になる

社会人になってもアメフトを続けるつもりで、4年生のときにはアメフトチームをもっている企業から内定をもらっていました。その後、母校の大学から職員にならないかという誘いがあったんです。大学の職員になると、社会人リーグでアメフトを続けることはできないので、すごく悩みました。でも、これまで何不自由な大学生活を送らせてくれた母校の力になりたいという気持ちが次第に大きくなり、大学の職員になることにしました。

15年続けてきたアメフトをやめて、最初の一年はやっぱり後悔しました。やめてはじめて、アメフトが自分の生活の一部になっていたことに気づいたんです。自分の気持ちに嘘をつけて、「もう決めたことだから悔いはない」と口では言っていましたが、アメフトをやりたい気持ちがいっきにあふれ出さないように、心のなかにふたをしている感じでした。

今は、大学のアメフトチームのコーチを週末だけやっています。自ら防具をつけて後輩の練習台になって、自分ができない鬱憤を晴らしたりもしています。教え子が活躍してくれるのは、コーチにしか味わえない醍醐味。それを実感してからコーチもおもしろいと思うようになりました。



Photo: Yamamoto Takayuki

週末、母校のアメフトチームでコーチをする

## 自分のために働くことが組織のためになる

ぼくは大学の建物を管理する仕事をしています。必要な修繕を行うほか、これから獲得すべき学生のニーズや志向をリサーチして、それにあった施設の企画を提案します。企画が通れば、施設の完成まで担当します。

1年目は上司に指示されたとおりに動くことしかできませんでした。でも、ある日、外部から問い合わせがあったときに上手く説明できなかつたんです。それからは、指示される前に自分できちんと考えて、自分から提案できるようになりました。指示されて仕事をするのと、自分で計画を立てて、責任をもって仕事をやりとげるのでは、達成感がまったく違います。それ以来、自分のために仕事をして、それが組織のためになったらいいと考えるようになりました。

ぼくは情報を目で得ることしかできないので、たまに周りについていけないときがあります。たとえば、緊急事態が起きて同僚たちがバタバタ動いているのに、状況がつかめなくてぼやぼやしてしまうこともあります。また、連絡の方法がメール中心になってしまうので、一方通行にならないように、伝えたいことが相手にちゃんと伝わるように、文面をしっかりと考えるようにしています。まだまだですけどね。

ぼくのポリシーは、「石の上にも3年なんてとんでもない。石の上にも10年!」です。アメフトは、10年以上続けて本当に認められる選手になれました。仕事でもなんでも、10年間情熱を注ぎ込んで、一心不乱に取り組んだら、一角の人間になれると思うんです。この仕事を始めて6年目です



ネパールで。  
休みができるとふらっと一人旅に出かける

Photo: Yamamoto Takayuki

が、10年たつたらもっといろんなことが見えてくるだろうと思っています。

仕事は忙しくて、月曜から土曜まで9時～20時頃まで働きます。遅いときは22時くらいまで仕事をします。日曜日は大学のアメフトチームのコーチをするので、休みの日はほとんどありません。インターネットで服を買ったり、健康ランドでサウナに入ったりして気晴らしをしています!

## これから

今は目の前にある課題や問題を一つひとつ解決していくのに精一杯で、まだはっきりした将来の目標はありません。でも、難聴というハンディに打ち勝ちアメフトで活躍する過程でつちかっただけの忍耐力や逆境を成長に変える力を、これからも最大限に発揮していきたいです。

ぼくは、これまでの経験を小学校や中学校でときどき講演しています。この活動をこれからも続けていきたいと思っています。今でも、健常者と障害者の歴然とした格差を感じることがあります。ぼくは今の職場に「一般正職員」として採用されましたが、どんなにがんばっても、人並以上に能力があっても、「障害者雇用」扱いになってしまう人も多いのです。出世もなかなかできません。障害があることでいじめにあう人もまだたくさんいます。ぼくにできることは、これから社会の主役になる小学生や中学生に、「障害者も努力している。みんなはそれを見ていないだけ。見た目は健常者とは違うけど、人間は平等だから、いじめや差別をしないで」と伝えていくことだと思っています。



大学のアメフトの試合

Photo: Yamamoto Takayuki

## 高校時代をふりかえって

ぼくにとっての高校生活は、社会に出て行くための通過点でした。中学校までは難聴クラスで勉強していたのですが、高校では健常者と同じクラスに入りました。はじめは多少戸惑いましたが、クラスメートやアメフトの仲間とつきあうことで、コミュニケーション力が養われました。

「アメフトで大学に進学する」という明確な目標を持って高校生活を過ごしたのは、ぼくにとってとても大事なことだったと思っています。だから、今、高校時代の自分にメッセージを伝えるとしたら、次のように言いたいです。『『これをやりたい』という明確なビジョンをもって過ごしてほしい。夢や目標は他人が決めることではなく、自分が決めること。自分で決めたことは最後までやり通す。『できなくてもしゃーないな』というのは、とことんやってみてはじめて言えることであって、途中であきらめたり、投げやりになったりすると、夢や目標が達成できる確率はゼロに等しくなる。それから、自分の可能性は自分にしかわからないから、自分を信じて自分の決めた道を力強く歩いてほしい。周囲にいろいろ言われても気にすることなく、責任をもって自分を貫き通したからこそ、今の『山本隆幸』がいるんです』



「であい:7人の高校生の素顔」より

Photo: T.JF